

動物行動の研究から(1)

動物たちとの対話

柴坂 寿子

「動物の生活する野外の自然のなかに出かけて行き、動物の自然な行動を観察し記述する」。それが動物の行動研究の基本的な研究方法であった。これは原則的には誰もができるように簡素な方法である。それがゆえに、この方法がどのような態度や考えを内に含み、どのような効果を人に与えると思われるのかを少し考えてみたい。

自然の中で研究者たちが動物を見つめるとき、ひとつの仮定があると私は思う。それは、それぞれの種の動物たちは私たちとは違った必要性や世界への

意味付けを持っているだろうということである。言い換えれば、目の前に広がる自然も、動物たちには私たちとは違って「見えて」いるだろうということだ。私たちの目には同じように白くしか見えないモンシロチョウのオスとメスを、モンシロチョウは区別できる仕組みを持っている。それはモンシロチョウにとってはこの区別をすることが繁殖の上で重要な意味を持っているからだ。

動物が自分とは違った存在であることを認めた上で、またそれだからこそ、彼らの持つ意味の世界を

理解しようとする。それが動物行動研究のやっていることであり、それが可能だと仮定することが動物行動研究の出発点なのだとは私は思う。そして様々な種の動物たちが違った世界を「見て」いる可能性に気づくとき私たちが感じるのは、人知を超えた世界の豊かさのように思う。

動物たちの意味の世界を理解しようとするとき、私たちは彼らに言葉で尋ねることはできない。動物たちの行動を彼らの必要性や世界への意味づけを表すものとして捉え、彼らの意味の世界を「読み取る」。その時私たちは、自分たちのありったけの感覚のチャンネルを通して意味を読み取ろうとする。ときには、私たちには彼らが思っていることが、なぜかは説明できないけれど「分かっちゃいます」ことがある。アヒルの雛が孵化して初めて見た動くものを親と思ひ、後を追うという話は高校の教科書にも載っている。しかしその様子をフィルムで見ると、知識は了解に変わる。孵化して間もないアヒル

の雛は辺りを見回し、鋭い高い声でピーピー鳴き続ける。雛はあるべき何かがないので、不安に感じそれを捜しているということを私たちは一瞬のうちに感じ取ってしまうのだ。そして動くものが雛に与えられると、雛の声はピヨピヨといった穏やかな声に変わり、動きも落ち着いたものになる。そこから私たちは、何等考えることなく彼らの安心感を感じ取ってしまうのである。

それは信号として音が情報を伝えているわけではなく、声と状況とを連合学習しただけなのでもなく、彼らの声の持っている質が、私たちに安心感や不安感を呼び起こしているように私は思う。彼らは私たちと共通の祖先や似たような環境を持っている存在である。だから私たちが感じ取ってしまうものが、彼らが感じていることに本当に近い可能性は大いにあるのだ。だから不安を感じとった私たちは、雛にとつてついでに行くものがない状態は不安なものだろうという仮説から出発するだろう。自分自身の

感覚に基づいてこうした仮説を立てることは、時に言われるほど非科学的なものだと私は決して思わない。ただし、私たちは彼らとは種が違うことも確かである。だから私たちの受け取る感じは、もしかしたら彼らの感じと全く違うかもしれない。それは行動研究者が自分の感覚とは別に、思考の部分で可能性として「考えて」いることなのだ。そしてこの「考える」部分は、動物たちの意味世界を本当に知ろうという意思に支えられているのだと思う。

多くのチャンネルを通して私たちが動物たちから読み取ったことは、必ずしも教的データや言語的記述としてうまく表現できるものとは限らない。こうしたギャップに関して、アフリカでゴリラを研究した山極寿一は次のように述べている。「まだうまく記述することのできないでいるゴリラの表情としては、彼らの眼の動きと色合いがある。ゴリラと意思を通じ合うことができる」と最初に私が感じたのは、まさにこの眼の表情だった。ゴリラは相手の眼を

じっと見ることが多い。彼らと見つめ合っているうちに、いつしか私は彼らの表情を読み取り、無意識のうちに彼らの気持ちを探しようとしていた。その判断は決して間違っていないかっただろうと、私は思っている。しかし、それをどのように分類し記述したらいいいのか、今もって私にはよく分からないのである。おびえた眼、怒った眼、疑わしそうな眼、好奇心に富んだ眼、優しそうな眼、というようにゴリラの眼にはいくつもの表情がある。不安になると眼はきよろきよろ動くし、興味を示すとじっと動かなくなる。怒ったときには眼がきつくなるし、恨めしそうな表情では斜視に見える。彼らの眼の色も、好奇心を持つと輝きが増すように見えるし、怒ると淡色に変わるような気がする。でも、それを記述しようとする時、どうしても擬人的な表現に頼らざるを得なくなってしまう。シャラーやフォッシー（注）
..著名なゴリラ研究者）も同じ様な壁にぶつかっらしい。シャラーは、ゴリラの眼が情緒の指標とし

て最適であることに早くから気づいていた。しかし、彼もゴリラの眼の表情を、神経質な、うさんくさそうな、大胆な、もの柔らかな、穏やかな、といった表現でしか記述できなかった。フォッシーも、シルバーバックたちに襲われたとき、強い興奮によって彼らの眼の色がいつもの薄茶色からネコの眼のような黄色に変わっていたことを記述しているし、著書にはゴリラの眼の表情から判断したゴリラの心理が随所に描かれている（p. 156-157）。

動物行動の研究者たちはなるべく主観的な言葉を避け、客観的な言葉で行動を記述しようとしてきた。例えば、「あるチンパンジーが他のチンパンジーに『食物をねだった』』というよりも、「あるチンパンジーが他のチンパンジーに『手をさしのばした』』というように。それは単に科学的という体裁にこだわるからだけではなく、だれもが記述から同じ行動を思い浮かべ、共有できるようにという意図のものだった。『食物をねだる』とだけいったな

ら、それから思い浮かべられる行動は幾種もあるだろう。しかし山極が述べているように、本来の意図とは逆に、客観的な言葉を使うことによって、観察者が読み取っていることがかえってうまく伝えられないという現象が起こっているのだ。

さらに言えば、私たちが「読み取る」ことのできる動物たちの意味世界を、さらに他の人に伝えるため言葉に変えていこうとするとき、そこで多くの情報が失われてしまう可能性が高いということだ。それは私たちの言語の持つ限界とも言えるだろう。言語の持つこうした限界に関しては、他の分野でも様々な人が指摘している。例えば、ダンス・セラピストとして知られるアナ・ハルプリンは、自分の身体感覚を絵画として表す作業を、「いわゆる言語が表現できないことを第二の言語で表現することだ。いわゆる言語は人類の進化の歴史の中でずっと後になって発達してきたため、人類の経験することをすべて表現できるほどの体系にはなっていないのだと

思う」と説明している。

動物行動研究者たちのジレンマは、科学が言葉の上に成り立っている限り避け得ないものなのだろう。読み取ることから言葉で語ることに移行するときには情報のロスが起こることの自覚と、読み取ったことをより正確に伝達できるような言葉を捜す努力と、そのためには「客観的」といわれる言葉の持つ限界を意識してこれにこだわりすぎない態度とが、自分の観察に正直な動物行動研究者たちのぎりぎりの選択なのだろうと思う。

私たちが動物の行動から何かを読み取ろうとするとき、彼らがその何かを表現しようとする意図しているかは問題ではない。しかし、動物たち同士がお互いに積極的にコミュニケーションを交わしているのも事実である。実際、いわゆる言葉を持たない動物たちの「会話」の豊富さは、動物行動学が明らかにしてきたものも重要な発見であった。海の中でイカが急速に体色を変えてコミュニケーションを取り合

う姿、ある種の鳥のオスがメスに求愛するために、真上にジャンプしては足をバタバタさせながら落ちることを繰り返す姿などなど。何でもここまでしてとってしまうほど、動物たちは懸命にコミュニケーションしようとしている。その姿は、「コミュニケーションする存在としての動物」を私たちに強く印象づける。授業のなかで動物のコミュニケーションについてのフィルムを見てもらうと、学生たちからは、「以前は鳥が鳴いているのを聞いても、ただ鳴いているとしか思わなかったけれど、今はそれで何を伝えようとしているのかと考えるようになった」といった感想が多く寄せられるのである。

自然の中で動物たちと暮らしてみた研究者が、感じとっていることの一つは、動物たちの生活の緩やかな時間の流れである。例えば、動物行動学の父といわれるコンラート・ローレンツは「よっぽどの怠け者でない」とガンやカモの行動の研究はできない。彼らときたらものすごくのんびりなんだから」と

いつている。ゴリラ研究者の山極も、ゴリラの一日について次のようにいつている。「のんびりしてます。朝だいたいベッドに日が当たるまで寝てゐる。目をさますと、大きなびをして、おならをする。それから、こちらが見ていてイライラするくらい、何をするでもなくその辺をのろろ動いつている。腕を組んで、何か考えことでもしていつているようにおもむろに歩いたりして、一時間ぐらい過ごす。それから十時くらいまで採食する。(中略)それで十時くらいになるとベッドをつくつて午後二時くらいまで昼寝をします。昼寝から起きると、また二時間くらい休んだり、ちよつと食べたりをくり返す。このあいだに子どもは遊びまわり、おとなは発情していれば交尾をします。四時になると急にガツガツ食べ出す。五時になると寝場所を探し始め、六時にはベッドを作つて寝てしまふ。だいたいそんな一日ですな」(立花隆⁽²⁾ p. 230)。南米のホエザルを研究していつる伊沢も次のように述べていつる。「それにこれが

稀代の怠け者で、一日中寝てばかりいつるんです。夜は、夕方の四時ごろにはもう寝てしまふ。十六時間も寝て、朝八時ごろ起きる。しばらくウダウダしてから、その辺の葉をつまんで採食する。それが終わるとすぐ、昼寝を二時間ぐらいする。起きるとまたしばらくウダウダしていつて、それから食べて寝て終わり。群れ間で吠え合ふとき以外、活発な活動らしい活動をまるでしないんです。ですから見ていつてこんな退屈なサルはいつません。観察する方もハンモック持参で、向こうが寝たらこちらも寝る、といふ態勢でないといふ、とつてもやつてられませぬ」(立花⁽²⁾ p. 453-454)。動物たちののんびりさ加減に、「研究」といつる仕事に動機づけられた研究者たちは呆れたり、困惑したりする。しかし、それと同時にその時間の流れにつきあおふともしていつるのである。例えはミツバチのように、動物の種類によつてはむしろ活発に活動する姿のほうが私たちの目につくものもあるだらう。また、ガンやカモやゴリラやホ

エザルたちがのんびりしているだけなのでもない。彼らも危険がおとずれたときや求愛の時期には活発な動きを見せる。しかし、自然の中で動物たちと共にあることは、私たちがいつも過ごしているせわしい時間とは違った、のんびりと緩やかな時間の流れ方がありうることを私たちに気づかせ、さらにこうした時間の流れの心地よさ、安心感を共に体験する可能性を開いていることは確かだろうと思う。

動物たちにとって自分たちの周りをうろろしている人間たちはどんな存在なのだろうか。動物たちが人が側にいることに慣れてもらいたい、人を見ても逃げ出さないようにするいわゆる「人づけ」は、動物行動研究の第一歩である。動物の種類によって、この「受け入れ」の困難さは様々である。しかし受け入れが完了すると、思いもかけないほど人と動物の距離が縮まることもある。山極はこんな体験を語っている。

「…雨が強いと、ゴリラはたいいていハゲニアという

大きな木の洞を探して、そこで雨やどりをするんです。ぼくもそうするんですが、あるとき、ぼくが雨やどりをした洞の中に、後からゴリラが入ってきた。

“シリー”というブラックバックで、かなり大きいやつなんですが、ぼくがそこにいるのを見ても平気で入ってきた。狭いので、場所をゆずり合ってもお互いに向い合わせにくくついて、あぐらをかいて座るような格好でいるしかない。そのうちお互いに眠くなってきましてね、座ったまま眠ってしまった。ゴリラの肩の上にぼくの頭を乗せる格好で、しばらく寝込んでしまったこともありまし(2)（立花 p. 228—229）。

野外で動物の行動を研究している人たちのなかには、研究する時間を大幅に犠牲にしても保護活動や動物福祉の活動をする人たちが多い。なかにはこうした活動のほうが中心になってしまった研究者たちもいる。彼らの動機は自分の研究対象がいなくなるに困るからという程度のものではない。ゴリラ研究

者であったダイアン・フォッシーは保護活動に熱心だった余り、密猟者たちに逆恨みされ殺されてしまった。チンパンジー研究者であるジェーン・グドールの最新の著書⁽³⁾には、彼女が実験施設などで狭い檻の中に閉じこめられたチンパンジーたちを訪問したときの写真が載せられている。ジェーンはチンパンジーに手をさしのべ、チンパンジーもまたジェーンに手をさしのべている。二人の間には深い悲しみと理解し合うもの、同士の愛情が流れていて、思わず涙してしまうくらいである。

研究者たちの動物たちとの関わりは、動物たちの生活をじゃませずに観察するという間接的なものだ。しかし彼らに受け入れられ、長い間彼らと同じ環境の中で暮らし、一頭一頭を個別に知り、動物の一生での重要なライフイベントを共有することで、動物と自分とに通じ合うものがあることを強く感じるのでないのだろうか。

通じ合う程度や通じ合うものが何かは、研究対象

の動物の種類によっても違うかもしれない。また研究者のなかには自分のキャリアだけしか頭になく、動物と自分の関係なんてこれっぽっちも考えない人もいるだろう。それでもなお、長い時間をかけ、動物を自然の環境の中で見つめるといふ行為には、動物と人の間に通じ合う何かを発見する可能性が大きく開けているのだと私は思う。

(お茶の水女子大学生活科学部)

引用文献

- (1) 山極寿一 『ゴリラとヒトの間』 講談社 一九九三
- (2) 立花隆 『サル学の現在』 平凡社 一九九一
- (3) グドール・J. 『心の窓』 どうぶつ社 一九九四